山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第16号（2003.8）

生命の表現に関する環境

荘司　泰弘

The Environments in Presentation of Life

by
SHOUJI Yasuhiro

(Received June 18, 2003)

キーワード：教育課程　生命　表現　環境

Ⅰ．はじめに

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「韓国の幼児の表現活動と文化的背景の関連性に関する教科教育内容研究」における「幼児教育の教育理念・教育課程の研究」の分担研究である。2002年に発表した「生命を表現する教育課程」（荘司2002）の継続報告であり、韓国の幼児教育における表現活動の保育材や保育環境などの保育財（child care property）を明らかにし、歴史的・民族的な文化背景との関連性を考察するものである。本論文は日本と韓国における生命に関するカリキュラムに基づく保育環境、保育材がもたらす効果を検討する事、並びに、問題を内包する保育環境や保育材と今後の在り方を明らかにする事を目標とし、生命に関する環境の在り方を考える事を目的とする。

Ⅱ．生命表現と保育材

色彩について――日本と韓国の保育室を見て感じたことは、積み木、ボール、紙、粘土、紙芝居、絵本、色紙（折り紙、切り紙、組み紙、ちぎり紙、貼り絵)、絵本（文字なし絵本、昔話絵本、民話絵本、物語絵本、知識絵本（科学絵本、観察絵本、認識絵本、生活絵本))など、保育室には色彩が溢れていることであった。韓国の昔話絵本や民話絵本は自然色を大切にしたものが多く、優しい色相で表現していたが、他の絵本に関してはやはり日本と同様、原色のきつい絵本が多かった。原色の遊具や絵本、保育材は自然色と比較すると不自然な人工色であることが明確になる。シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）は自然色を基調に保育材を設定し、自然界には白は存在しないため、白を排除している。すなわち、シュタイナーは原色を排除したことが重要である。シュタイナーはいわば日本古来の色彩を室内装飾や保育財に採用し、自然光を取り入れるための大きな窓を設けている。茜色、曙色、浅蘇芳、浅緋、小豆色、洗朱、一斤染、今様、燕脂、鉛丹、黄丹、唐紅、金赤、銀朱、呉藍、紅梅、珊瑚色、朱色、猩々緋、深紅、蘇芳、石竹色、退紅、代赭色、丹、躑躅色、薔薇色、緋色、紅赤、紅色、牡丹色、桃色などを原色を基調に赤色として単純化して子どもに提供することには問題がある。原色の基礎色は純白であり、原色は人工色であるだけでなく、不自然な色であることを指摘したい。原色を人工照明の下で見た場合と自然光の下で見た場合では色相が異なるが、自然色には明暗の変化だけで色相の変化はな

いのである。

照明について——釜山大学付設保育所は自然光を豊富に取り入れる素晴らしい設計になっていたし、窓を大きく、低くして設計したヤンサン幼稚園、釜山市内の郊外幼稚園、窓を多くして採光を豊富にした梨花大学校附属幼稚園、柔らかい照明に気を付けていた双葉幼稚園と釜山大学校付設保育センターなど、日本の幼稚園と同様に室内照明を配慮した構造になっていた。しかし、必要以上に明るすぎる室内に居すぎると神経がいらだったり、長時間ライトアップされた結婚式に招かれると疲れが溜まるように、強烈な人工光を必要以上に当てることは正常な神経や感性に悪影響を与えることを指摘したい。自然の光が暖かく差している時に、保育室に蛍光灯の人工照明がさらに必要なのだろうか。人工照明の下で色彩を調整された保育材は自然光の下では浮き上がってしまい、違和感さえ感じる。プラスティック遊具やプラスティック製の小物入れ、子ども用の絵の具やクレヨン、カラーボールや小麦粉粘土、塩化ビニール製のブロック積み木などには原色のものが多く、原色は人工照明の下では目に痛いほど刺激が強い。デパートや子ども用品の店でライトアップされた中で購入した子ども達の服の色を加えると、日本と韓国の保育室には鮮やかすぎる色が暴力的に氾濫しているとも言える。また、韓国では園庭にある遊具に原色が使われているものが多く、自然光の下では浮き上がって見えるほど過激な色彩に思えたことが印象的であった。

素材について——韓国の遊具にはプラスティック製のものが多く、自動車好きの国民性を反映してミニカーなどの金属製の遊具が好まれていた。木地色の木製遊具が少なく、木製遊具には原色を基調としたモンテッソーリカラーが付けられていた。遊具には木製、紙製、布製などの修理ができるものが望ましい。子ども達には手の加えようのないプラスティックや金属製の素材は不適切であることを指摘したい。壊れたら捨て去って新しい物を買う物質文化環境から、子ども達の前で保育中に壊れた遊具を修理することで物を大切にする精神文化を伝えたいからである。遊具は買って与えるものではなく、手作り絵本や手作り遊具に見られるように、子ども達と一緒に製作するものだと考える。子ども達だけに製作活動をさせるのではなく、保育者も一緒に製作することは、子ども達に製作の仕方や技術を指導するのではなく、造りたい気持ちを育てることになる。すなわち、子ども達の製作衝動を喚起するには既製品の遊具ではなく、手作りの絵本や遊具が必要なのである。製作衝動を喚起するという観点から、日本や韓国で頻繁に行われるようになった廃材を利用した造形表現にも疑問が残る。使用済みの廃材を利用した廃材製作は空き箱や牛乳パックなどで行われるが、廃材自体を素材とする造形活動は表面に印刷された絵や文字が乱雑に調和を損ない、美的要素に乏しいことを指摘したい。一度、廃材を解体して素材に戻す必要があるのではないだろうか。廃材製作とリサイクルは異なるのだから、物を大切にすることを伝える意図よりは造形衝動を鼓舞する方を選びたい。子ども自身が折り方を発見できるように、折り紙の作品を元の折り跡のついた紙に戻す保育者の日常作業と同様、廃材を解体して素材に戻す作業を日常化することを勧めたい。線材、画材、隗材など、素材に戻すことを確認しておく。木の枝やストローを大きさや長さによって分けておいたり、小さくなって使いにくくなったクレヨンを集めて溶かし、子どもの拳大のクレヨンにしたりする日常作業があってこそ、造形素材として、自然素材、人工素材、廃材、描画素材、製作

素材になるのである。いずれにせよ、子ども達には保育者の手が加わった最高の素材を渡したいと思う。また、豊富に用意した素材は工夫する力を取ることにもなる。セロハンテープが無くなったからといってすぐに出す必要はなく、無いから無いという当たり前のことを知らせることがまず必要であろう。紙をくっつけようとしている子どもは、ホッチキスやクリップ、綴じ代を考えることが必要になる糊、揃えて折ってくっつけることなどを発見するからである。一人だけで製作する場合よりもみんなで製作することの方が多いのだから、道具の譲り合いという観点からも少なめの保育材が望ましいと考える。教育の機会均等と表現活動は本来折り合うことが難しいと考える。一斉に同じことを同じだけする一斉保育では一人ひとり異なる子どもの表現衝動に制限をもうけることになってしまう。異なる表現活動を同じ場所でするためにも少なめの保育材にすることが大切なのではないだろうか。

展示について——韓国と日本の幼稚園に共通して、三輪車、手押し車、ボール、縄、フープ、手軽に好きな場所に持ち運んで遊ぶことができるはずの「移動遊具」(movable toys) が整然としまい込まれている。跳び箱、マット、巧技台、三輪車、自転車、箱車、ボール、なわ、フープ、棒、竹馬、ホッピング、大型積み木は大人の手で出し入れが管理されているように思える。使うための遊具であって、展示するための遊具ではないはずである。時間がくれば活動の最中でも「お片づけ」により、すべてゼロにもどすという日本独特の傾向を韓国に広げたくないと考える。「片づけ」とは0に戻すことではないことを指摘しておく。ヨーロッパの幼稚園では、保育活動の邪魔にならない場所を選んで製作し、子ども達が製作中の作品の周りに赤色のビニールテープを貼り、数日間に渡る製作活動を保証している。製作中にも展示ができ、製作後も手を加えることができるわけである。管理しやすい環境は使いやすい環境とは限らないから、ハサミはハサミ、筆は筆、糊は糊と分類して管理するのではなく、道具も製作中の作品の傍に持っていけるように、造形キットにして保管することが大切になる。子どもの製作意欲や表現衝動を維持する立場から、せっかく作っている大作を片づけてしまわないで、取っておける場所を常に確保してみたり、道具だけ片づけて作品はかたづけないでおくことが大切なのではないだろうか。韓国や日本において、描画素材や造形素材は保存性に優れたものが好んで用意されているが、表現対象である生命は流動的で固定されるものではない。動きや変化と保存性はミスマッチであることを指摘したい。したがって、作品を展示するという大人側の発想を変えていく必要がある。子どもが描いたり、造ったりした作品を大人の目の高さで展示しているが、少なくとも2つの問題が生じる。まず、子どもの目の高さではないため、子ども達には良く見えないことが挙げられる。次に、造形表現の魅力は新たな表現を加えたり、修正したりすることであるが、展示してしまうと製作意欲が満たされないことが問題になる。廊下の壁際に作品を展示し、いつでも描き続けたり、造り続けたりできる高さと表現素材を近くに用意しておくことが大切なのではなかろうか。

以上、保育財について述べてきたが、表現活動は造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現などと区別して捉えるのではなく、生命表現の窓口として理解することが大切だと考える。身体を揺すって唄いながら空中に造った塊に彩色して語り合っている子どもの活動を分析する必要はないのである。表現としてそのまま受け止めるべきではなかろうか。ま

た、高価な遊具や人工化された遊具ではなく、小石や草花などの素朴な素材、木登りやドロ遊びなどの素朴な遊びが生命を表現する素材や遊びではないだろうか。精密なままごとセットを用意するよりも丸太の輪切りを見立てる活動が大切であり、半素材でイメージをふくらませる活動が表現活動において重要であろう。

Ⅲ．生命表現と保育環境

造形活動とは――キンダーガルテンの前身である「創造的活動衝動を育むための施設」(Anstalt zur Pflege des schäffenden Thätigkeitstriebes) という名称にみられるように、フレーベルの「子どもの園」は子どもの創造性に働きかけることが目的となっていた。単に自然を規範とするのではなく、創造活動や表現活動において、自然界のような形成衝動を現すこと、「労作」(die Arbeit) が大切にされていた。労作をしている状態が自然と合一した人間の状態であり、労作を求める生得的傾向が子どもに備わっているとフレーベルは考えたのである。

一般に、人が労働したり、作業をしたり、生産したりするのは、単に肉体を維持するための衣食住の糧を得るためだと解釈されがちであるが、フレーベルは、衣食住の確保のために働くという思想は、低俗な本末転倒した発想であると批判している。「人間が働いたり、行動したり、創造したりするのは、ただ自分の身体、肉体を維持するため、衣食住を手に入れるためだというような考えは、許容するだけで、広めたり、伝えたくない、卑しい考えです。そうではなく、――人間の創造の起源と本来の創造は、人間の中にある精神的なものによって、神的なものを自分の外に形作るため、また、自己自身の精神的、神的本質や神の本質を認識するためのものなのです」(Fröbel:1826aa) と考えるフレーベルにとって、造形活動によって得られる生産物や報酬、造形活動によって養われる技能などは副次的なものであり、造形する行為こそ人間の生きざまを神に証す行為なのである。フレーベルは遊びを通して教育しようとしたのではなく、労作の出発点となる遊びの真価を造形活動に求めたと言えよう。

園庭について――1850年頃にフレーベルが発行していた『同志と同一の協力のもとに活動している者のための日曜紙』に掲載された「キンダーガルテンにおける子ども達のための庭」(Der Garten für die Kinder im Kindergarten) という論文の中で、「もし、私達がキンダーガルテンという語に隠されているものに注意を払うならば、キンダーガルテンという語は、私達に自らキンダーガルテンの方法と手段を問いかけているのではなかろうか。すなわち、子ども達の庭においてである。キンダーガルテンは、キンダーガルテンの全般にわたる完成された理念は、明確に表明されたキンダーガルテンの思想は、必然的に庭を要求し、庭の中に子ども達のための庭を必然的に要求する」(Fröbel:1850) とフレーベルが記述しているように、フレーベルにとって、「庭」(der Garten) が提供する自然環境、庭が象徴する自然が自己教育を援助する環境の全てだったと考えられる。しかし、フレーベルのキンダーガルテンが日本に紹介され、明治９年に東京女子師範学校附属幼稚園として動き出して以来、森や木陰は入ってはいけない築山になり、運動会や駐車スペースの確保のために園庭が運動場になってきているのが現状である。生命を基本テーマとする「キンダーガルテン」(der Kindergarten 子どもの園) には生命に溢れた園庭が不可欠の環境であることを指摘したい。運動場と化した園庭には、すべり台、ブランコ、ジャングルジ

ム、低鉄棒、雲梯、太鼓橋、登り棒、登り網、ネット、平均台、タイヤ、組み合わせたアスレチック総合遊具が設置されている。だが、竹林、樹木、池、川、小動物、草地、丘などのある園庭は少なくなってきている。フレーベルが園庭に求めた環境内容は生命の法則を関知させることであった。個々の生命は不断の創造活動を続ける神性の表現であり、あらゆる生命から「神への道」が通じていることを直観できる環境、全ての生命が根源においては神と一致することを予感できる環境、自然界における全ての生命は互いに異なっているように見えても、元を辿ってみると唯一の根源である神から生まれたものであることを確認できる環境を提示するのが園庭の役割と考えられる。積み木で知られる第３から第６遊具は、屋外の砂場で使うと、すぐに山や川が砂で作られ、小動物が住む建造物や活気のある街になるし、大きな樹の木陰で野鳥のさえずりを聞きながら使うと、無味乾燥な室内で使った場合よりも遙かに子どもの感性が発揮される。コロンビア大学附属幼稚園のパティ・ヒル（Patty Smith Hill 1868-1946）が考案した大型箱積み木も室内で使うと騒音の元となり、崩れやすい不安定な構造物になるが、屋外の芝生の上で使うと、安定した静かな作業が可能になるのである。

砂場について――韓国の砂場の砂を舐めてみると、塩分が含まれた酸性土であることがわかる。塩分を含んだ砂が持ち出されるため、砂場の周囲には草も生えていない。砂場の砂に一番良い砂は川砂であるが、現在、川砂は手に入れることができない。山砂は夏熱く、冬冷たいし、すぐ堅くなり、底の方に雑菌の巣になる層ができます。保水性が良いので、水を使って遊ぶ砂場に適している。海砂は夏冷たく、冬暖かく、ドロダンゴのサラサラ粉が作れるが、塩分が抜けるまで周りの植物が枯れやすくなる欠点がある。２トン車で１車分くらいが限度と言えよう。それ以上の砂場を望むならば、塩に強い野シバを周りに植えてフィルター効果を持たせることが必要になる。砂場に時々登場するネコやイヌのフン対策のために業者に消毒を頼む園が増えているが、樹木にかけた農薬や園庭の環境ホルモンが流れ込む砂場にさらに消毒薬を加えるのには問題がある。ネコやイヌがトイレをするのは嫌気性の雑菌がはびこっているからであり、砂場の表面を毎日１回、柔らかく混ぜて空気を良く入れてやると、好気性の細菌が根付くようになる。良い砂場は干しブドウのような匂いがするもので、ネコやイヌはトイレをしなくなるわけである。しかし、人間の世界には公衆トイレがあるのだから、イヌやネコに砂場をトイレにしてほしくなければ、近くに用を足した後の砂を置いてイヌやネコ用の公衆トイレを作っておけば良いわけである。本来、砂場は園庭の環境ホルモンを濾過するフィルターの役をするため、必ず、「水の道」が集まるように設置されている。底には大きめのレキ砂(大きめの粒の砂)が２メートル、中ほどには普通の海砂が２メートル、上には細かい海砂（海辺の波打ち際の砂）が１メートル敷いてあります。時間とともに上の砂と中ほどの砂が混じり合い、水はけの良い砂場になる。「水の道」の集まる場所に海砂の砂場、水はけの悪い場所に山砂と粘土を使った田んぼのようなドロ場を作ることを勧めたい。

固定遊具の素材について――日本や韓国の固定遊具は鋳物製、プラスティック製のものが多く、木製の固定遊具も防腐剤がしっかりと使ってある。酸性雨が降るのか、韓国の金属製の固定遊具の根本に穴が開いていたことが気にかかる。安全管理の面から、腐ったり、痛んだりしたら、すぐに取り替えられる固定遊具にする必要があるのではないだろうか。

金属製のチエーンブランコよりも大きな樹の枝を使ったロープブランコ、防腐剤で染みた合板の固定遊具よりは間伐材を使った固定遊具を使いたい。「潜在危険」(latent danger)として気になった壊れた固定遊具のことを書いたが、むき出しの蛍光灯、首が入り込んでも切ることができないステンレス製の柵、子どもの足から頭の高さに壁に貼られた保育室の姿見用の鏡、ひっかかりのある壁などはそれだけでは事故につながらないが、子どもの活発な動きが加わると事故につながる可能性を指摘しておきたい。

Ⅳ．生命遊びと保育財

遊びと表現——フレーベルにとって、遊びと指導は相反する概念であり、教育学的発想、子どもの遊びをどのように指導するか、は矛盾した発想であったと考えられるであろう。同様に、表現活動と表現指導が矛盾する概念であることを指摘したい。与えられた自発性、指導の手が入った自発性が「子どもの自発性」と呼べないのと同じ理由で、遊びに指導的要素が入ったとたん、遊びは遊びでなくなる。表現活動にも外部からの働き掛けが加わったとたん、自由表現ではなくなることになる。では、どのようにして表現技術を身に付けさせるのか、と疑問を投げかけられる方がいるであろう。遊びは自由に自発的に自己の内面の創造性を表現する活動であり、外部からの誘導や干渉が入った時点で遊びという表現活動が「遊びを通した教育」になってしまう。表現活動には、自由性、自発性という要素が不可欠であり、「表現を通した教育」よりも表現したいという衝動を培うことが幼児期には大切なのではなかろうか。フレーベルの遊びに対する理解を押さえておくことにする。「遊ぶこと、遊びは、子どもの発達の最高位にあり、子どもの時期の人間発達の最高位のものです。というのは、遊びとは遊びという言葉が自ら語っているように、内面の自由な表現であり、自己の内面の必要と要求からの内面の表現だからです。遊びは子どもの段階での人間の精神的産物であり、最も純粋な産物であり、また、全体的人間生活の模範や写しともいえ、人間と全ての事物の中にある内面に隠された自然生活の模範や写しともいえます。それゆえに、遊びは遊び自身において喜びを喚起し、自由を喚起し、満足を喚起するのです。人間の中にある平安や人間の外面にある平安を喚起し、現実との和合を喚起します。全ての善なるもの源泉は遊びの中に宿り、遊びから生じます。身体の疲れるまでしっかりと、じっくりと自発的に、持続して遊ぶような子どもは、成長のあかつきには、さらにしっかりした、さらに落ち着いた、さらに根気強い援助的な人間になるであろうし、献身的に自他の幸福をわかる援助的人間になるでしょう。遊んでいる子どもは子どもの時代における子どもの生活の最も美しい現象ではないでしょうか。——子どもが遊ぶ姿に子どもが現れていませんか。——遊びながら寝入った子どもに完璧な高尚さがありませんか——」(Fröbel:1826ab) と記述しているように、信頼に満ちた理解であり、子どもにとって世の中全てを遊びとして理解している。子どもの遊びは遊びとして理解し、決して教育の手段とはき違えないようにすることが大切であるのではなかろうか。フレーベルは遊びを通して子どもを教育しようとしたのではなく、子どもから、全てを遊ぶ子どもの姿から私達大人が、全てを楽しみ、満足し、喜ぶ姿勢を学ぶように勧めているのだと言えよう。したがって、表現したい衝動、満足感を伴う表現、表現を楽しむことが大切になる。幼児には幼児期特有の感覚があり、幼児の感覚を失った我々大人が幼児の表現活動に関与すると、表現を通した教育になってしまうことを押さえておこう。フレーベルは「各々の対象物は、たとえ、もの言わぬ言葉で語るとはいえ、事物の現れを通して、絶えず事物から、

事物について人間に語りかけており、大人以上に子どもに語りかけているのです。まるで事物の生命を子どもの生命に結びつけようとするかのようです。それゆえ、人間の外面的発達のために、特に人間の内面的、精神的、心情的な発達のためにも、単に事物の現象によって環境を明瞭な言葉で語るだけでなく、むしろ、子どもよりも大人がもっと早くから導かれ、事物のもの言わぬ言葉を単に聞き取るだけでなく、さらに自分自身でも聞き取れるようになろうとするのは、全く本質的なことなのです。それゆえ、真っ先に注意深い母親が、同様に関与している保育者も、あなた方の人間的な感情に完全に忠実に試み、目に見える言葉だけでなく、このもの言わぬ事物に、早くから真の表現、理解できる音声表現、言語表現や歌の表現を与える試みをしてください。表現を与える試みによって、もの言わぬ静かな無言の生命が、音や言葉を通して子どもに近づき、音や言葉によってもの言わぬ生命の中に一層具体的なものを子どもはすぐに発見し、感じ、そして、認識することでしょう」(Fröbel:1838) と記述し、子どもが生得的に有している直観能力に注意を喚起している。遊びによって、子どもは事物からのもの言わぬ言葉を直観し、事物の生命を聞き取っているわけである。しかし、残念ながら、私達大人は総合的感覚を忘れてしまったために、まず、聞き取れるようになろうとすることが必要になる。生命の律動性、無生物が表現するものや生物との共同感情は、幼児の有する直観能力でのみ被造物の生命を聴き取ることが可能となる。子どもの感覚をなくした大人が要求する課題画は果たして子ども達が表現したい内容なのだろうか。子ども達の生活の中から生まれる自由画へと移行する必要がある。また、子ども達だけが造形活動をし、保育者がじっと見ている姿には以前から疑問を感じている。子どもに表現活動を要求するのみで、自分は表現しようとしない大人は子どもの表現活動を阻害することになる。まして、同じ表現感覚や表現基盤を持たない大人には子どもの表現活動を指導することはできないのである。では、だれが指導できるのか。また、指導行為が表現活動を阻害するのならば、どのようにすれば良いのか。フレーベルの用意した答えは異年齢児との交流による学習であった。

異年齢の表現伝達——幼児期は教えられて覚えるよりも、人に教えて覚えたり、人がしているのを見て覚える時期である。異なる年齢の子ども達でグループを作ると、自然に助け合いや学習活動が生じる。子ども同士の表現体験を積み重ねながら、子ども達の発見する力、関わる力を信じて、支えることが大切だと考える。表現したい心は芽生えるものであって、外から与えられるものではないからである。他の子どもの伝達表現を見ること、誰かに伝えたい気持ち、誰かに表現したいという衝動が大切なのである。子ども達の柔軟な発想が発揮されるのは、あるがままの状態で関わり合う時だと言えよう。兄弟姉妹のいる子どもが減ってきている時代にあって、離れた年齢の子ども達と接することが大切になる。私達大人がどんなに20歳児、30歳児になろうとしても身近な先生は年長の子ども達なのである。年長児と遊ぶ体験は、自分よりも小さい子どもを意識し、自分が年長児としての表現活動を自由に、自発的に学ぶことになるのである。砂場や廊下でも異年齢での活動は数多く見られるが、意図的に異年齢のグループを設定すると、助け合い、支え合う方向で年齢を意識するようである。子ども達は子ども達の中で成長すると言えよう。私達保育者の支えはわずかなものに過ぎず、子どもが表現を伝える機会や環境をできる限り広げる義務があるだけだと考える。年長児がどのように表現しているかを小さい子ども達はしっかりと見ている。異年齢グループの交流は、教えることで学び、見ることで発見することを可

能にするだけでなく、表現活動に自由性と自主性を保証することになる。大人から与えられた知識や技術では得られない満足感をもたらすようである。子ども達が表現する可能性や持ち味は、様々な人との出会いによって広がるため、子ども時代の子ども達との出会いが人生の中で大きく影響することを異年齢児との交流を通して感じている。しかし、近年、少子化がどんどん進み、同じ年齢の子ども達が少なくなってきた。その分、年齢が近い子ども達同士の関わりも少なくなり、遊びの中から子ども同士で学んでいくことが非常に少なくなっている。園の周辺をみても同じことが言えよう。むしろ、塾に通ったり、習い事に通うことが要求され、身近に関わることができる子ども達の人数は年々減少傾向にあると言えよう。園内だけの枠にとらわれずに、他園との交流保育をしていくことによって、色々な個性を持った子ども達と様々な関わりを持つことができ、幅広い人間関係を作り、困難なことにも立ち向かう力、助け合う力などが育っていくのではないだろうか。ウコッケイや池のコイ、春風が運んでくる草花のほのかな香、風に舞うサクラの花びらを追いかけたり、芝生の上に放されたウサギなど、春の訪れを感じた子ども達は次第に心を開き、他園の友達とも一緒に遊べるようになります。様々な共有した思いがお互いの心を解け合わすきっかけになったようである。幼稚園、保育園という「子どもの園」のテーマは「生命」である。生命と関わる環境が子ども達が他者と関わる力を育てるのかもしれない。子どもは子ども達の中で成長する。園内だけでの人間関係では得られない、横や縦の人間関係を広げたり、感動体験を共有したりできる他園との交流保育が必要になっている。今一度、他園と交流ができるように環境を見直して、他園の子どもと自然に関わることができる機会をより多く作っていくことが大切だと考える。少人数の園内だけではほとんど起こらない子ども同士のトラブルも、交流保育をすることで体験することができる。少人数では味わうことのできない集団遊びの楽しさを一緒に共有する体験が、子ども達にとってはとても大切な力となっていくのではないだろうか。

伝承遊びについて——梨花大学校附属幼稚園で保育者がシラサギの写真を見せ、ノコギリの刃を長くした形に軟質紙を切り、左右両手首に２枚貼り、背中で貼り合わせてシラサギの羽にしていた。保育者の真似をして踊りを覚え、保育者のチャング（鼓）に合わせて日本のサギ舞のように踊っていた。また、保育者ではなく、お年寄りが子ども達を前に韓国の民話をストーリーテリングされていた。保育は保育者だけがするものではない。バスの運転手さん、給食の先生、保護者のみなさん、子どもを取り巻く大人達と子育てをするという発想の転換が日本には必要なのではないだろうか。時間や都合が許すかぎり、参加できる活動には「子どもを取り巻く大人達」に声をかけてみることが大切になる。反対に、地域に結びついた行事に参加することで、地域ぐるみの子育てができる。地域の行事は子ども達にとって故郷の思いや原体験につながる貴重な体験といえよう。友達から仲間へ、仲間から地域集団へと帰属意識は広がって行くことになる。フレーベルが1826年に発行していた『教育的家庭。自己教育と他者教育のための週刊誌』(Fröbel:1826)（*Die erziehenden Familien. Wochenblatt für Selbstbildung und die Bildung Anderern*）は、自分の家庭だけでする家庭教育ではなく、複数家族が助け合って子育てをしようとする地域ネットワークを作ろうとした試みであった。たとえ自分の家族がこれなくても、来ることができた家族が自分を受け入れてくれる。人に受け入れられる体験をした子ども達は人を受け入れることができるようになる。また、保護者や地域の住民の中には様々な職業や

技術を持った方がおられ、身近な方達に接する体験は、子ども達の興味や関心を広げるきっかけになる。子ども達は一人で生活しているのではない。地域の方々が寄り合って支えてくださっていることを感謝の念を持って確認することが重要である。地域の文化や伝統を原風景にする試みとして、お年寄りによる昔話や民話の伝承を勧めたい。核家族化が進み、お年寄りの中には、お孫さんと離れて生活をしているため、孫の成長を身近に見ることができない方が多かったり、おじいちゃん、おばあちゃんのやさしさを知らない子ども達が増えているようである。高齢者との交流で気が付いたことは、子ども達とお年寄りは同じレベルで共感することができる、大切な仲間同士だということであった。子ども達はお年寄りから、長い人生で培った体験の中から色々な遊びを教えてもらい、お年寄りは子ども達から、忘れていた感動や発見を思い起こされ、お互いを高め合う素晴らしい仲間と言えよう。自分の家庭の中だけでなく、地域全体で、みんなのおじいちゃん、おばあちゃん、みんなの孫という気持ちで関わる広義の家族への発想転換が必要であろう。

イメージについて——他人の気持ちや立場になることで思いやり、やさしさに導く表現活動は心の教育と考えられる。幼児期は感情移入の時期であり、感情移入の本質はネコや樹などの喋れないものに言葉を貸し、山や川などの生命のないものに命を貸す行為である。他者の気持ちになったりできるだけではなく、風や石などの無生物の気持ちにもなれる時期なのである。心理学の立場では、他のものと自分を混同したり、生命の無い物に生命活動を見たり、話すはずのないものと語り合ったりすることは、感覚が未分化なために生じる錯覚状態なのであるが、幼稚園教育学の立場では、合自然性に基づく感情移入の状態として幼児期に必要な特性と考る。大人にとっては不自然な行為でも、子どもにとっては合自然な状態であり、全てのものに感情移入できるのが幼児期の魅力とも考えられる。したがって、感覚が未分化なために生じる錯覚状態として矯正するのではなく、子どもが先天的に有する全ての有機体と共存する共同感情の結果として検討しなおす必要がある。キンダーガルテンの時期にある子どもは、イヌやネコなどの小動物に言葉を貸し与えたり、山や石などの無生物に感情を転移できる特質を有している。だからこそ、他人の気持ちや立場になったり、思いやりややさしさの萌芽となるのである。言語で語りかけてこないイヌやネコ、草や花であっても、感覚で語り合え、生命のない石や風とも共感することができる子ども達の特質を大切にする必要がある。すなわち、幼児期にはいじめたり、いじめられたりする日常生活の中で、いじめられている子どもに感情移入し、いじめられる側の気持ちになることができるのである。言葉や概念でいじめを教えても、どのようにしていじめるかという方法を教えることになりかねない。いじめたくないという気持ちを育てるには、言葉や概念ではなく、幼児期の感情移入で培われた情動的表現こそが大切なのである。知能には動作性知能と言語性知能があり、幼児期の子どもの特質は動作性の知能にある。動作性知能は身体で覚えた知識であり、身体で考え、感覚で考えることが幼児期の特性と考えられるであろう。フレーベルは、「子どもが身の回りの外面現象全般の中でいくばくかの生命事実として、自分自身でではあるが、特別に、生き生きとした感覚や感情として知覚し、後には子どもの思考によってよく知り、たとえ、自分では言葉によって決して言い表せないようなものが、子どもの卵斑の最も外側に、一番最初に生じます」(Fröbel: 1851) と、乳幼児期は感覚や感情によって外界を知覚することを述べ、乳幼児期は言葉の前操作段階として、感覚的知能に至る感覚体験を積み重ねる時期であることを示唆してい

る。だから、フレーベルは感覚体験を重視し、総合的感覚力（直観 die Anschauung）を大切にしたわけである。感覚が主である幼児期に対して、少年の持ち味が言語性知能にあることは、言葉や概念を駆使し、判断したり、推理している姿から理解できるであろう。フレーベルは、「あなたの子どもに力をつけるための概括した身体上のものに、自分自身で展開するような、堅固になるための自らの内にあるものに、機会を与えてください。子どもに機会を与えることによって、子どもの内面的な生命のツボミがふくらむ時、すぐにツボミは自発的に開くのです。しかしながら、就学適齢期や成熟するまでは、この内面的な強化や、発達の他の外面的徴候がないことを、事物の描写や行為を自らのものとするような徴候が全くないことを要求します。子ども時代を配慮する、あなた方、親愛なる子どもの養育者よ！子ども時代は全てにおいて、子どもの愛らしい力を身につける時期であり、内面的強化の時期であり、目に見えない心情や精神を直観する時期なのです。学校は歩み出るものの時期であり、外面的なものを現す時期であり、型性的な心情の力や精神の力を意識する時期なのです。このことに関して、就学前の能力と、就学後の能力との間に、重要な境界線をあなたが持たせると同時に、学校の特色を持たせ、子どもの次に来る部分への心残りはあるのだが、ごく平凡なものを越えていかせることがますます一層、両者をしばしば相互に混合することになるのです」（Fröbel:1844）と、幼児期は身体的感覚知能の時期であり、少年期は操作的概念知能の時期であることを記している。方法や技術を身に付ける児童期に対し、フレーベルは「まずやってみて、それから考え、また行動に移してみる」という体験と試行錯誤を大切にする方法を提唱しているが、行為する力は、精神的行為と身体的行為の相互止揚作用で強まることを示唆している。幼児期の動作性知能を大切にする方法は、幼児期の感情移入傾向とも合致している。子どもが内面の映像イメージを表現する際、紙を水中、筆をサカナに見立てたりする傾向などを大切にすることは、表現衝動を鼓舞することになる。カメラの三脚を威張っている、角のある遊具を意地悪していると感じるような「相貌的知覚」（physiognomic perception）は幼児期特有の感覚であり、子どもがメルヒェンやファンタジーの世界の住人であるからこその感覚表現ではなかろうか。

造形と生命賛歌――手先が未発達なため、結果として破壊してしまいがちな創造衝動を建設的な方向に向ける素材を用いた造形遊びは手の教育と言えよう。フレーベルの作業具の一番最初の立体は子どもの身体そのものだった。すなわち、動植物の飼育栽培、散歩、リトミック、母と愛撫の歌の遊戯も造形活動となるのである。飼育栽培などの造園作業、園庭で生命と関わることによって発生する板やボール紙の造形、織り紙や切り紙の造形などの生命の喜びを表現した作品は、両親へのプレゼントになるだけでなく、収穫物や製作物は販売されていた。贈答品や販売物になることが目的ではなく、収穫の喜びや贈られた者の喜びが目的だったのである。生命と喜び、生命と感謝の感覚体験を確認する活動であったと言えよう。また、身の回りの生命に関わる創造的活動衝動の結果であったことに、遊びとの結びつきがあったことが重要である。生命と遊びが結びついた時、労作心になるのである。フレーベルが、「神の精神が形造られていないものに、形態を持っていないものに漂い、形造られていないもの、形態を持っていないものを動かして、石や植物、動物や人間は、形、形態、存在や生命をもらったのです。神は自分自身の模像として人間を造り、神の似姿に人間を造られた。だから、人間は神と同じように創造し、働くべきである。神

の精神、すなわち、人間の精神は、形造られていないものに、形態を持っていないものに漂い、形造られていないもの、形態を持っていないものを動かして、形や形態を、存在や生命をもたらされたものを生じさせなければなりません。このことが高度な意味であり、深い意義であり、私達が完璧な真実で呼び、意味づけて呼ぶように、労作や勤勉の大きな目的であり、働きや創造の目的なのです」(Frobel:1826ac) と記述しているように、神性の表現としての造形活動を前提にして教育を考えている。神性を本性とする人間は、神と同じように創造し、働くことになるわけであり、神性を授かったことに対する感謝、生命への讃歌が表現活動の目的になるのである。内面の創造性を外面に表現する創造活動をする際に、人間は産み出す苦しみの中で初めて自己陶冶できる。産みの苦しみに出会って初めて人間は人間自身となり、人間は労働や生産によって神を直観できるようになるわけである。ゆえに、労作は単に職業教育や技術訓練ではなく、あらゆる人間教育の不可欠の要素になるのである。フレーベルが、「一般に、人間が創造者と似たことをした時に、初めて人間の創造者を理解するように、創造者が自然において造られた形態を、子どもが自分で造形した時に、子どもも学び、特に、子どもは理解するのです」(Fröbel:1862) と記述しているように、神が自然界を創造された行為の「模倣」(die Nachahmung) として、子どもが造形活動を通して自然環境に関わることは、単に自己の「創造的活動衝動」を満たすだけではなく、「自然」から学ぶ行為になるのである。さらに、フレーベルは「人間が自然を理解するためには、自然がするように、特色ある芸術的方法で、いわば、新たなものを自分から自分の中に創造しなければならないのです」と記述し、造形活動による内面の創造性を「自然」に則って外面化することで、初めて人間は自己の本質を認識するとしています。したがって、フレーベルにとって、人間が労働したり、創造したり、生産物をつくったりすることは、実は自己の本性や使命を探すことであり、生命賛歌の表現活動なのである。人も自分も喜びたいという子どもの純粋な気持ちと労作心は、「高尚な精神はしばしば子どもらしい遊びにある」(Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel) というシラーの言葉を標語にしたフレーベルの目標であった。栽培と飼育は身近に生命を感じる作業であるが、植え替えの時、ビッシリと根がひしめき合っている鉢植えは水やり当番が3日も水をやらないと枯れてしまう。イジメを指導しているかのような飼育小屋や飼育水槽、飼育箱はエサやり当番がエサをやらないと死んでしまう。当番制にして生命を軽んじた保育、不自然な環境は、子どもの情操保育に望ましくないと考える。造花やぬいぐるみと異なることを教えるためだけに生命を使って良いはずがありません。落ち葉を嫌って落葉樹を植えなかったり、竹ボウキで掃いて植物の芽を削り取ったりするような不自然な環境を子どもに提示することは生命に対する不敬を教えることに他ならない。大きな樹は落葉に残った水分や空中から水分を集め、調整をして周りに森を作り、小動物が生息できる環境を整える働きをする。落ち葉や雑草はムシの住処になり、土に戻り、大地に根を張った植物の生命力の糧になる。動植物の生態系が調和された姿が観察できる森によって、失われていく自然との共存の道が残される。カエルやザリガニやホタルを狩り捕ってきて、飼育箱で殺してしまう環境ではなく、子どもの園に遊びに来てもらい、再び元の場所に返す環境、園庭に動植物が増えたら周りの環境に子ども達と一緒に植えたり、放したりして生命を広げに行くことが大切なのではなかろうか。なにより、邪魔にならない場所に雑草を植え替える保護者の姿、観察し終わったり、増えた小動物を周辺の自然環境に返す保育者の姿を見ることによって、生命をテーマにしたフレーベルの精神、自然環境による情操

保育の場が開けると考える。従来の園外保育（散歩（木の実拾い、イモ掘り、バッタ採り、夕日の観察）、遠足（動物園、水族館、植物園、自然博物館、プラネタリウム）、見学（消防署、商店街、交番、郷土資料館））から生命環境に富んだ屋外保育へ移行することが重要になる。戸外遊びの中心になるのは草花やムシなどの自然物と触れることであるが、自転車やサッカーなどの運動遊びに変質していることが問題であると考える。戸外保育の有する心身の開放感、日光浴、外気浴、自然物との接触による情操調整、知的好奇心の芽生えや感性が、表現活動に必要不可欠な要素であると考える。

他国の方との交流——他国の方との自然な交流は、他国の言葉に関心を持つきっかけとなるだけでなく、子ども達に（もっと思いを伝えたい）、（相手の思っていることを理解したい）という感情をかき立てる。自分以外の人の考えや立場に思いをはせ、人を理解するきっかけとなると考える。子ども達の心は、年齢が低いほど、言葉自体をあまり必要とせず、文化の違いも抵抗なく受け入れるのである。絵本や遊びなどの共通する媒体を通して、（言葉は通じなくても気持ちは通い合える）ことも体験できる。同じ人間であるということを、関わり合う中で自然と学び取り、表現活動の共通性を確認できるのである。大人は「この絵本は英語だから、読んでも解らないだろう」と決めつけている面があり、私達大人の方が子どものオープンマインドを学ばなければならないであろう。子ども達の可能性や持ち味は、様々な人との出会いによって広がるようである。異なる文化に接することで、私達の文化の再発見もできる。他国の方だからと、特別扱いすることなく、お互いの文化を認め合い、関わり合えたら、素晴らしい交流体験ができると考える。子ども時代の出会いが、人生を決めると言っても過言ではない。他国の方々との交流は、大人よりもむしろ子ども達の方が何の隔たりもなくすんなり受け入れ、ごく自然体で楽しく交流している場面を見せてくれるであろう。そして、和み合う様子に嬉しくなり、通い合っている様子に驚きを覚えることが表現活動に喜びを加味することになる。

V．まとめ

山口県の童謡詩人、金子みすゞ（1903-1930）の“わたしと小鳥とすずと”に、「わたしが両手をひろげても、お空はちっともとべないが、とべる小鳥はわたしのように、地面（じべた）をはやくは走れない。わたしがからだをゆすっても、きれいな音はでないけど、あの鳴るすずはわたしのように、たくさんなうたは知らないよ。すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい」という詩がある。“みんなちがって、みんないい”

私達は一人ひとりの持ち味を大切にする保育を心がけてきた。しかし、子ども達の表現したい気持ち保証するには上記の発想が保育者に要求されるのだが、幼児自身は過去になんらかの体験があり、思い出すきっかけがあることでイメージを操作できるようになる。原体験や「原風景」（original view）の確保こそが表現活動の基礎と言えよう。幼児期を過ごした風土の状況は格別の情感を伴って想起され、懐かしさや暖かさの感覚が大切さややすらぎの思いとして表現される。幼児の原体験や原風景が大気汚染、水質の汚濁、土壌の汚染、騒音、悪臭としてトラウマにならないようにすることが大切ではなかろうか。美的情操は生命に結びつけて提供したい。

引用・参考文献

荘司泰弘（2002）：生命を表現する教育課程：山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第14号：pp.13-26

Fröbel（1826）：*Die erziehenden Familien. Wochenblatt fur Selbstbildung und die Bildung Anderern*：Nachlaß Friedrich Fröbel 105：Akademie der padagogischen Wissenschaft der DDR：Der allgem. deutschen Erziehungsanstalt in Keilhau

Fröbel（1826*a*）：*Die Menschenerziehung, die Erziehungs= , Unterrichts= und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau ; dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, wilherm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter*：Allgemeinen Deutschen Erziehungsanstalt. Keilhau：Commission bey A. Wienbrack. Leipzig

a. S.50.Z.15−S.51.Z.1

b. S.69.Z.4−Z.22

c. S.49.Z.1−Z.15

Fröbel（1838）：Die Kugel und der Würfel. Als zweites Spielzeug des Kindes：In：*"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben !". Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben*：Nachlaß Friedrich Fröbel：Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg：Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit：No 11. Am 11. März 1838

S.84.Z.29−Z.51

Fröbel（1844）：*"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben !" Anleitung zum Gebrauche der in dem Kindergarten zu Blankenburg bei Rudolstadt ausgefährten dritten Gabe eines Spiel= und Beschäftigungsganzen, des einmal allseitig getheilten Würfels："Die Freude der Kinder." in Zweihundert Sachdarstellungen und ebensovielen Reimliedchen ; für Mütter und Pflegerinnen des früheren Kinderlebens, besonders für Vorsteher und Vorsteherinnen Gehilfen und Gehilfinnen an Kinderpflegeanstalten jeder Art zu Stadt und Land ; namentlich an solchen Anstalten, welche sich zeitgemäß zu entwickelnden "Kindergärten" erauf bilden wollen, von Friedrich Fröbel. "Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel." Nebst zwei gedruckten und zwei lithographischen Übersichten*：Anstalt zur Pflege des Beschaftigungstriebes der Kindheit und Jugend, Blankenburg bei Rudolstadt：Nachlaß Friedrich Frobel 224：Friedrich Fröbel Museum

S.33.Z.10−Z.26

Fröbel（1850）：Der Garten fur die Kinder im Kindergarten：In：*Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung*：Nachlaß Friedrich Fröbel：Friedrich Frobel Museum. Bad Blankenburg：Der Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach：Nr. 15. Montag, den 15. April 1850

S . 113 . Z . 33–Z . 39
Fröbel (1851) : *Anleitung zum rechten Gebrauche der dritten Gabe des entwickelnd erziehenden Spiel= und Beschäftigungsganzen : Des einmal allseitig getheilten W ürfels , "Die Freude der Kinder", gegeben von Friedrich Fröbel* : Der Kinderbeschaftigungsänstalt. Bad Liebenstein : Nachlaß Friedrich Fröbel 215 : Friedrich Fröbel Museum
S . 3 . Z . 22–Z . 28
Fröbel (1862) : Friedrich Fröbel ; Wichard Lange : Plan der Elementarschule und Ankündigung einer Erziehungs= Anstalt im Waisenhause zu Burgdorf : In : *Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften* : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1 : Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin
S . 484 . Z . 11–Z . 14